

世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM



館長対談

菅野昭正(世田谷文学館名誉館長)

開館25周年記念事業報告

受贈記念 夷齋先生・石川淳 事業報告

「ヨシタケシンスケ展がもしれない」メインビジュアル原画(部分) ©Shinsuke Yoshitake

館長の作家対談

ゲスト
菅野昭正
(フランス文学者、文芸評論家、世田谷文学館名誉館長)

聞き手
亀山郁夫
(世田谷文学館館長)

2007年6月から21年3月まで約14年間にわたり当館館長を務め、プロデュース企画『澁澤龍彦の記憶』書籍化をはじめとして館の活動をひろげ、温かく見守ってくださいました菅野昭正先生をお迎えし、新館長がお話を伺いました。

1821年生まれの文学者たち

亀山▼2021年はドストエフスキー生誕200年の記念すべき年です。同時に、フランス文学の最高峰とされるボードレールとフロベールの生誕200周年でもありました。私が菅野先生のお名前を最初に知ったのは、1974年刊行の評論集『詩の現在——12冊の詩集』です。当時、私は大学院生で、卒論で取り上げたドストエフスキーとは対極にある20世紀ロシアの詩に関心が向きはじめた時期でした。詩を論じるうえで、同時代の詩人を取り上げた先生の評論集がひとつの目標になり、私自

身の20世紀ロシア未来派の研究がはじまりました。

菅野▼1821年はドストエフスキー、フロベール、ボードレールの生誕年で、のちの文学史に名を残す偉大な人物たちが、奇しくも同じ年に生まれているのは興味深いことですね。今は忘れられがちですが、アミエルというスイスの思想家も同年生まれで、彼は没年(1881年)もドストエフスキーと同じです。代表作の『アミエルの日記』は哲学的ないしは形而上学的内容で、ヒポコンデリーについても詳しく記しました。ドストエフスキーの『罪と罰』にヒポコンデリーの主人公が登場するように、あの頃のヨーロッパでは、東も西もヒポコンデリアが関心を集めていたのだらうと推察

しています。

亀山▼『罪と罰』の翻訳時に私は「心気症」と訳したのですが、「ヒポコンデリー」に

ておいた方が良かったかもしれないな、と感じます。あれは、一種のパラノイアに近い精神状態で、「自分はこういう病气じゃないか」といったん思いこんだら、そこから逃れられない、いわば病气心配性ですね。現代なら、ネットにアクセスすればたちまち解決できる。それができない状態に置かれた青年の悲劇、という隠された意味もありそうです。その意味ではまさに、時代病というのですが、時代病そのものを構造的にとらえる視点が重要かもしれないな、と思いました。

フロベールの功績

亀山▼菅野先生は1976年、40代半ばに、マラルメ研究と並行して、フロベールの『ボヴァ

うか？

菅野▼それは19世紀小説とは何であるかに関わりますので、少し話が広がるかと思いますが……。小説で語られる物語の特質について、現代作家のクンデラは近代小説を三つに分けて「物語を語る」「物語を描く」「物語を考える」としました。そのなかで、「物語を描く」作家の代表をフロベールだとしていて、それは僕もその通りだと思っています。フロベールは物語の具体的な形の組み立て方が面白い。

19世紀のフランス文学の枠の中で考えると、バルザックにしてもスタンダールにしても、物語を活気づけるため、波乱万丈な人生を送った人物を軸に小説を展開しました。『ボヴァリー夫人』の場合、フロベールは派手な登場人物

でなく、「地方生活の

倦怠感や退屈」を描きたかったのだと思います。地方で鬱屈している人間、そういう人たちが当時のフランスに沢山いることを物語化しようと考へ、それが上手く成功した。この作品で19世紀小説にひとつの区切りがついたといえるのではないのでしょうか。

それとは別に、フロベールの功績はやはり文章です。もの

菅野昭正(かんの・あきまさ)

文芸評論家、フランス文学者。東京大学名誉教授。1930年、神奈川県生まれ。東京大学文学部仏文科卒業。『詩学創造』(84年)で芸術選奨文部大臣賞、『ステファヌ・マラルメ』(85年)で読売文学賞、ジョナサン・リデル『慈しみの女神たち』(2011年、共訳)で日本翻訳出版文化賞を受賞。著書に『詩の現在——12冊の詩集』『小説の現在』『変容する文学のなかで』『憂鬱の文学史』『小説家大岡昇平』、訳書にクロード・シモン『ファルサロスの戦い』、ミラン・クンデラ『不滅』ほか多数。97年紫綬褒章、2006年旭日中綬章受章。日本藝術院会員。世田谷文学館名誉館長。



『小説と映画の世紀』
2021年 未来社



菅野昭正編『澁澤龍彦の記憶』
2018年 河出書房新社



『詩の現在——12冊の詩集』
1974年 集英社

リー夫人』を翻訳なさっておられるのですね。先生とフロベールとの間にどんな「出会い」があったのか、伺いたいと思うのですが。
菅野▼お会いしたことも、文通したこともありませんが(笑)。最初は中学生のときに広津和郎の訳で読みました。当時は特に関心を受けなかったのですが、大学に入って原書に触れてからは、文章の魅力に惹かれました。フロベールの文章は「超」のつく名文です。小説は『ボヴァリー夫人』が有名ですが、僕はむしろ『感情教育』の方が青年の自己形成の過程が上手く描かれていて好きですね。

フロベールについては、サルトルが『家の馬鹿息子』という膨大な評論を書いています。12月に日本語訳の第5巻が出版されましたが、第1巻は40年近く前だったかな。サルトルはフロベールを一個人として見ながら、時代全体の中での個人として、個人のなかに時代がどう反映し、個人の働きかけで時代がどう変わるかを論じています。作家の全体化、つまり、ひとりの人間のなかには個性的普遍があるとするサルトルの研究方法は、外国文学のみならず日本文学を考へる場合でも色々示唆されるところは大きいのではないかと思います。

亀山▼私は大学1年のときに山田壽の訳で『ボヴァリー夫人』を読みました。今もそのときの記録が残っています。でも、フロベールでは、同じ巻に収められた『三つの物語』のなかの「聖ジュリアン伝」に強く惹かれた記憶があるんです。今にして思えば、「聖ジュリアン伝」はドストエフスキーの好む「大いなる罪人」の物語と似ていて、無意識のうちにそれと繋がって



凄く彫琢といいますが、実際に文章を精錬するために、途方もない時間を費やしています。そうはいっても、フロベールは語るに足る仕事をしましたが、20世紀文学に何を残したかという疑問符が付くと思います。サルトルのように、フロベールの生き方全体を問題にするとは、色々な点で出てきますが、小説に限ると作品自体があまりにも完成され過ぎています。これは物語を描くことだけに集中して展開した作品です。実際に、ブルーストがフロベールの文章を絶賛したような意味での評価はありますが、作品としては新しい時代にあまり即さない判断し、これでは現代は描けないと受け取る作家がかなりいました。研究の対象にはありませんが、文学としてフロベールを読むことはだんだん薄れてきているような気がします。

20世紀後半のフランスでは、ヌーヴォー・ロマン(新しい小説)という言葉がしきりに使われるようになり、その頃にフロベールを問題にする人はあまりいなくなつたように思います。バルザック、スタンダールは注目されていました。アクチュアルな現実がどこまで言葉で捉えられるかという観点では、ゾラにも関心が向けられていました。僕はあまり、ゾラの作品は好きではありませんけれども。

亀山▼彫琢された文章という観点からいうと、ドストエフスキーはフロベールからかなり遠いところにいるといえるのかもしれないね。場所によつては、書き殴つたと思われる箇所があります。その意味で、むしろバルザックに近いのだろうと想像します。ところが面白いことに、ドストエフスキーは『白痴』の終盤で、『ボ

ヴァリー夫人』を登場させているのです。殺害されるナスターシャが最初に読んでいた本という扱いです。当時は、まだロシア語の翻訳書が出ていませんから、フランス語の原書だと思われれます。おそらく彼が『白痴』を書いていたジュネーヴ時代に『ボヴァリー夫人』を読んだのだと思います。

最近のドストエフスキー研究で、ボヴァリー夫人の死の場面と、『白痴』のナスターシャの死の場面の描写に共通点があることが指摘されています。文体面などでフローベールから影響を受けることはなかったはずのドストエフスキーがあえて『ボヴァリー夫人』を持ち出したのは、どういう理由があるのか。これはあくまでも仮説ですが、ドストエフスキーは、ナスターシャの死について、これを、ロゴージンによる殺害ではなく、自殺として意味づけていた、と思います。

『小説と映画の世紀』

亀山▼じつは、この一年、映画化された『ボヴァリー夫人』をいくつか見ました。そのなかでは、私が際立っていると感じたのは、じつはロシア人の映画監督アレクサンドル・ソクーロフが制作したアダプテーションです。映画に出てくる田園風景が、私のイメージしていた『ボヴァリー夫人』の地方の農村とびたりと一致してい

るのに驚きました。主人公が抱くアンニュイの世界も見事に捉えられている。

常々思っていることですが、生誕200年を迎えたフローベールやドストエフスキーの作品が、今後どのように生き延びていくかというとき、私はアダプテーションを介しての可能性を否定しきれないのです。実際、最新のドストエフスキー研究においても、映像化の問題が世界の研究者たちの関心を集めています。

『ボヴァリー夫人』を読むには1週間以上かかりますが、映画であれば2時間程度でおよその世界を把握することができます。映画監督が優れていれば、原作以上に作品世界の深みを表象化できるかもしれません。もちろん言語には、映画とは異なつて、潜在意識を持統的に掘り起こしていく力があります。例えば、菅野先生は戦時中に読んだボードレールの詩を今でもぱつと朗読することがおできになります。すが、それはたんに記憶力というだけでなく、そこに何ものにも代えがたい強烈な言語体験が刻まれているからだと思います。では、今の若い人たちにそれだけの体験を持ちうるのか、という疑問です。むしろ、彼らの記憶のメインを占めるのは、映像体験のはずです。これは時代の宿命ですから致し方ありません。しかしこの現実を認めたくえて、古典の生き延びる道は、映画、演劇、オペラなどのアダプテーション

ンのうちにより大きな可能性がある、と思ったりますのですね。

そこで、先生の最新のご著書『小説と映画の世紀』に話題を移したいのですが、言語体験と映像体験の根本的な違いについて、先生はどのようにお考えになりますか。また、小説のアダプテーションという問題に対してポジティブな立場なのか、それとも文学は言語体験でなければ

違があるのではないのでしょうか。そうはいっても、映像だけで複雑なことを表現するのはとても難しいと思います。

小説と映画の根本的な違いは、小説は人間の内面をそのまま表現することが可能だという

ことです。喜びや悲しみといった心の動き、例えばブルーストは人間の悩みを広く深く、また時間の経過によつてさまざまに変容する内面を言語であらわしました。映画だと、それらをセリフであらわすのは結局は不可能だと思

ます。どんな名優でも、ブルーストが表現したようには人物の内面を表現することはできません。しかし、映像には全く別の、場面から場面へ現実的な信憑性を濃厚に塗りこめた、言語ではとてもあらわせない表現方法があります。僕は両者に優劣をつけることはできないと考えています。言語表現と映像表現の違いがあるうえで、両者をどのように結び合わせ、その差異をどのように考えるかという問いが執筆の出发点でした。撮影の裏話が中心になるような映画批評に対しては、以前から物足りなさを感じていました。

亀山▼これまで映画監督を中心とした映画論はありましたが、先生の今回のご著書は、小説と映画という異ジャンル間を繋いで、厳密なテキスト・クリティックを双方に向かつて行い、そこから生まれてくるものを言語化するという、今まであるようでなかった試みだと思います。創作ではなく、批評の言語を介して、映像が喚起されるというまれな経験もでき、この本独自の可能性を感じました。先生が若い時代にこのテーマに着手されなかったのは、小説と映画に対するリスペクトが、それぞれ別個のものとしてあつて、とても同じ土俵には上げられないという思いがあつたからでしょうか。

菅野▼ジャンルとして格差があるとみなしていました。

ば駄目だと思われるのか、本音をお聞きできればと思います。

菅野▼21世紀の現在、あらゆることが大きく変わりました。僕らの世代はまず言語、亀山さんの言葉でいうと言語体験から知的な生活がはじまりました。どの世代からかは正確にはわかりませんが、今の若い人たちは最初に映像から刷り込まれた経験が出发点になるという相

亀山▼小説が上で、映画が下だという格差ですね。その格差を意識の隅から追いやるには、やはり21世紀まで待たなければならなかったのでしょうか。

菅野▼本で取り上げた映画のうち、20世紀前半の作品はヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』だけで、ほかの映画は全て20世紀後半です。映像化にあたっては、例えば、カフカの『審判』は映画に現代的な高層ビルやコンピュータが出てくるように、時代設定を撮影時に移した作品が殆どです。映画が映画らしくなったのが20世紀後半で、それで漸く小説と同じレベルで評価できるようになったのではないかと思います。

亀山▼私は映画『ラ・マン』が好きで何度も見ました。しかし、デュラスの原作の方は全然駄目でした。

菅野▼僕はデュラスに関しては、評価と否定が半半ばしています。原作は小説でも自伝でもありませんが、大変上手く書けています。フランス語というエクリチュール(書くこと)で自分の回想を断片的に、思いつくままに文章を書いている。ただ、問題なのは、フランスの植民地統治時代のインドシナ社会についての視点が欠けているところ。映画は、そこに正面から向き合い時代を捉えています。デュラスの作品は時代を完全にシャットアウトしました。先程サルトルの言葉で、時代の枠のなかでの個人的



普遍性と言いましたが、デュラスの場合は、女性として自由に生きた部分は描かれているものの、その時代に生きたという意味での普遍性はないと思います。

亀山▼『ラ・マン』は映画が原作を凌駕したというのでしょうか。アノー監督はこの本の『薔薇の名前』でも取り上げられていますが、彼が世界的に評価されているイメージはあまりありません。メロドラマ性が強すぎると思われるのでしょうか。

菅野▼そうかもしれませんね。しかし、映画はメロドラマ的な側面が欠けると、どうも映画としては不具に見えかねませんね。スペクタクル性とメロドラマ性というのは映画に欠かせない要素だと思います。

亀山▼大賛成です。ドストエフスキーにしても完全なメロドラマの世界です。

菅野▼ドストエフスキーの場合は、考えるメロドラマですね。映画化は多くされているのでしょうか。

亀山▼膨大な数に上ります。演劇のみならず、宝塚にもなっています。ドストエフスキー作品のリプロダクション性の高さ、次々と各国で新しいものがつくられていることに驚きを禁じえません。古いところでは、ヒッチコックが、『見知らぬ乗客』や『疑惑の影』といった作品でドストエフスキーに興味を示していますね。最近、発見したお勧めの映画は、ロバート・シオドマクという監督の『大いなる罪びと』です。グレゴリー・ベックがすばらしい演技を見せていますが、ちよつと話が、先走りしました。(笑)。で、若い人たちがこうしたアダプテーションを

通して作品世界に接し、「え、これがドストエフスキーなの？ それじゃ原作は？」という感じで原作にかえていく、これが、これからの読まれ方のひとつだと思います。最初から翻訳本を読むことにあまり期待はできません。

しかしそうはいっても、例えばバステルナークの『ドクトル・ジバゴ』のように、波乱万丈なドラマを数時間の映画にするのは非常に困難です。フランスのブレッソン、イタリアのヴィスコンティのような監督たちが注目するのは、ドストエフスキーでいうと、中編小説ですね。『カラマーゾフの兄弟』のような大作に挑戦したのは、むしろ無名の監督たちで、大監督たちは見向きもしないというか、映画の素材としては相応しくないように思っているのかもしれないですね。ちなみに、バルトルッチが映画化したのは、初期の中編『分身』です。こんな事実にも、小説と映画のもつジャンルの特性がくつきりと浮かびあがってきます。つまり、映画を紹介した、最初の第一歩としてのドストエフスキー体験にも限界はあるということです。

そう、先生にお聞きしたいことがあります。先生は今回のご著書で、12本の映画を取り上げましたが、もしもこの先をお続けになるとしたら、どのような小説／映画についてお書きになろうと思われませんか。もう、たくさんなどと言わずに(笑)。

菅野▼夢物語として考えてみるならば、例えばシュレンドルフ監督の『ブリキの太鼓』でしょうか。ただ、原作を読んではいませんので……原作に忠実でないし難しいでしょうね。あとはブルーストでしょうか。日本の作品では、大岡昇

亀山▼本当にそう思います。例えば今日名前のあがった作家たちの作品について、そんなものは芥子粒の世界だと、容赦なく切り捨てようとする向きがあるはず。しかし、そうした流れに抗して、この「芥子粒」を育て、ある種の知的共同体のようなものへとつくり変えていくことが大事だと思います。相手が一人でも、二人でもいい、自分の感動を言葉にして発信していくことですね。

菅野▼例えば、文学館のような施設は戦前にはありませんでした。パブル景気の影響もあったのかもしれませんが、戦後日本にこのよ

平先生の『レイテ戦記』の映画化があったらいいなと思います。

これからの文学館、草の根文学運動

亀山▼最後になりますが、「教養」という問題についてぜひ伺います。このニュースレターの読者の方々も、きつと聞いてみたいのではないかと思います。菅野先生にとつて、教養とはどのようなものでしょうか。その定義を、先生の言葉でじかに聞いてみたい気がします。

菅野▼非常に難しい質問ですね。上手く答えられるかわかりませんが、戦前、つまり明治／大正／昭和の戦後までは、教養主義がとても大切にされていました。例えば、阿部次郎の『三太郎の日記』や倉田百三の『出家とその弟子』などは学生の必読書で、人格を磨きなさい、理想を持つて生きなさいという説教を聞かせる本がしきりに読まれたものです。当時、旧制高校文化というものがあり、それがイコール教養でした。小説は漱石や鷗外の作品などを読みましたが、戦前の教養主義では日本の古典はそれほど重要視されていませんでした。



考えるのではなく、当時、河

中て押し付けられた「配給された自由」配給された民主主義」だと皮肉を言ったように、受動的なところから出発してしまったのが、戦後の日本のある種の思想的な歪みだと思います。数年前に亡くなった加藤典洋君もよく論じていましたが、戦後の民主主義の歪みがのちの世代の若者に影響を与えていると思います。今、僕たちは現実本位、利害本位に生きていて、理想主義を失っていると思います。僕らの

うな施設が数多くできて、そこで職員の方々が立派な仕事をしています。昔、「草の根民主主義」という言葉がありました。地域に根付いた運動を通して政治に参加する民主主義の考え方ですけれども、その派生的な延長のような「草の根文学運動」を担う施設として、文学館は大きな役割を果たせるのではないかと思います。

亀山▼「草の根文学運動」、とてもよい言葉ですね。これだけの環境のなかに、これだけの空間があつて、なおかつ人が集まらない社会は寂しいです。集まり、語り合うことが大切なので、文学館は、その媒介となるべき空間、たんに文

終戦時、僕は15歳で旧制中学4年生でしたが、教養といわれていたものに対して疑いを持ちはじめていました。時代の悪気流、つまり戦争がもたらした様々な状況に対して、教養主義では何の抵抗もできないと感じたのです。戦争によつて、それまでの教養主義は完全に崩壊したと思います。岩波書店を拠点にした安倍能成をはじめ、まだそうでもないと思う知識人の一派はありましたが、そうした一部の動きを除いて、従来の教養主義が崩れた後に何をもちて教養とすることになったとくに、最初に広く普及したのは民主主義の理念にもとづく教養でした。しかし、民主主義について根本から

学だけではなく、まさに文化の空間をつくっていくことが重要な役割だと思っています。菅野▼在任中は世田谷文学館の果たす役割について、考え続ける日々だったようにも思います。亀山さんも初代館長の佐伯彰一さんの後を継いで、僕を飛び越して、これからの世田谷文学館のためによろしく願います。文学を地域の「草の根文学運動」で活性化して、それをここから全国に発信することができるようにと期待しています。

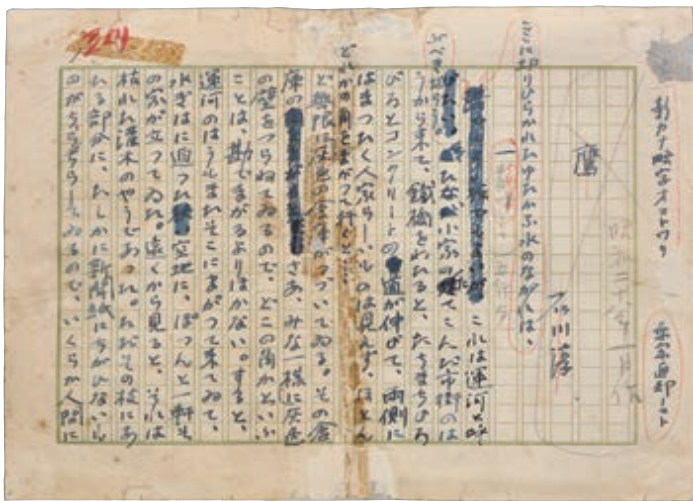
亀山▼どうもありがとうございました。

(2021年12月10日、世田谷文学館にて)



《夷齋先生・石川淳》

2021年4月24日(土)～9月26日(日)



「鷹」原稿

してきました。本企画は、昭和を代表する小説家で、世田谷区北澤に居住歴のある、石川淳(明治32・1899～昭和62・1987)の原稿をはじめとする貴重な自筆資料のほか、交流のあった作家、研究者からの受信書簡を紹介。これらの資料の大多数は、石川淳の長男・石川眞樹氏より令和元年度にご寄贈いただいたものです。

小説作品の原稿では、雑誌「表現」の休刊(1949年)により連載途中で未完となった「華嚴」全回分と、『鷹』『珊瑚』(いずれも53年刊)、『鳴神』

だいていた『諸国崎人傳』(57年刊)原稿一式もこの機に合わせて展示しました。原稿以外にも、日記や、『南画大體』(59年刊)執筆のためと思われる、池大雅、与謝蕪村ら近世文人画(南画)の大家とその代表作、所蔵する寺院、博物館、美術商についてのメモ、七代目市川團十郎(俳名・白猿)に関するメモなど評論執筆の準備と推定できた自筆資料をご紹介します。

石川淳宛の書簡からは、中野重治、小林秀雄、野間宏らの文学者に、安部公房、加藤周一、福永武彦、丸谷才一、開高健、島尾敏雄、三島由紀夫、澁澤龍彦ら後輩の作家たち、中国文学者の吉川幸次郎、歴史学の荻原延寿らの書簡を展示。後輩作家からは、執筆の計画や悩みを打ち明けるものもあり、世代や専門に関わらず石川に対する信頼、親しみ、敬意のこもった書簡が多く、それが手許に残されていた理由だったとも思われます。

本展のタイトルに石川淳の号「夷齋」を入れたのは、寄贈された自筆原稿のなかに、代表的な随筆集『夷齋偶言』、『夷齋清言』収録原稿一式が含まれていることと、受信書簡の後付の宛名に「夷齋先生」とあったことに因みます。石川淳は、江戸幕府の学問所・昌平黌の儒官を務めた漢学者の祖父・石川介(号・省齋)に幼いころから漢文を学んでおり、その素養はフランス文学への造詣と並んで、石川の創作において大きな特長となつて顕れます。その石川に国文

2021年度世田谷文学賞事業報告

第36回世田谷文学賞 入賞者発表

5部門で作品を募集し、合計324人から応募いただきました。入賞者の作品は公式HPに掲載する受賞作品集(PDFファイル)でお読みいただけます。(2022年3月末掲載予定)

●短歌部門(応募者数49名)

一席／田村敦子

二席／長谷川瞳

三席／永嶋辰子、石本一美

秀作／今村耕一、山館麻美

佳作／桑原謙二、檀上りく、木下知代子、

岡田優李、道端菜理、野上卓、丹羽功、

阿部章子、平野英輔、二井依里奈

特別賞／柏崎澄子、田村智、市原雅子、
岩野秀夫、海道勝代、井口恵

●詩部門(応募者数44名)

一席／土屋春美

二席／東和郎

三席／田村智、辻本純美子

秀作／大川薫、松本昂幸

●エッセイ部門(応募者数54名)

一席／尾張恵子

二席／中村福子

三席／松本昂幸、金子トシ子

(敬称略)

資料受贈報告

2021年10月8日～2022年1月26日

▼大木志門 金子秀夫 早乙女文子 渋谷代志枝 鈴木茂夫 谷口基 林桂 山本幸久

▼尼崎芸術文化協会 市川市文学ミュージアム 一茶記念館 井上靖記念文化財団 岩波書店 愛媛県生涯学習センター 大岡信研究会 小山市立博物館 神奈川近代文学館 紙の博物館 川崎市市民ミュージアム 北九州市立文学館 クマヒラ 黒澤明研究会 さいたま文学館 埼玉文芸家集団 佐佐木信綱研究会 駿府博物館 成城大学民俗学研究所 たましん地域文化財団 中央大学文学部 調布市武者小路実篤記念館 東京都江戸東京博物館 徳島県立文学書道館 日本歌人クラブ 日本芸術文化振興会日本博事務局 日本児童ベンクラブ 沼津市芹沢光治良記念館 野田宇太郎文学資料館 俳人協会 萩原朔太郎研究会 火野葦平資料の会 姫路文学館 福岡町立柳田國男・松岡家記念館 文京ふるさと歴史館 平凡社 武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館 悠光堂 与謝野晶子倶楽部 吉村昭記念文学館 早稲田大学會津八一記念博物館 和田誠事務所

▼「海」「海紅」「風」「経堂雜記」「空想カフェ」「くさくさ」「群系」「原型富山」「鴻」「心の花」「埼玉文学」「正午」「抒情文芸」「駿河台文芸」「川柳研究」「蠶」「たね」「短歌人」「地中海」となりあふ「飛火」「富山県歌人」「ブチ★モンド」「文藝軌道」「文章歩道」「焰」「本のParking」「窓」「ランブル」「りんごの木」「暦日」 (五十音順・団体名敬称略)



「夷齋先生・石川淳」パンフレット

展示風景

学者、中国文学者、歴史学者からも深く敬意を払い、時に手紙の中で「夷齋先生」と書き送っていた交遊の様子も伝わればと思つてのことでした。なお、本展で配布したパンフレットには、フランス文学者で、石川淳作品批評の第一人者でもある当館の菅野昭正名誉館長の文章を収録。50年代の代表作「鷹」について、書かれた当時を直に知る読み手による時代相を交えた解説も本展の成果の一つとなりました。



●川柳部門(応募者数103名)
一席／本多フミ子
二席／斉田裕子
三席／森沙恵子、伊藤光世
秀作／長谷川康子、竹本宏平
佳作／森田美子、田中智弘、出馬希美代、
船木澄子、泉信二、岩崎能楽、市原雅子、
服部迪夫、大室恵美子、今井愛舞



『りんごかも しれない』ブロンズ新社 2013年



『つまんないつまんない』白泉社 2017年

ヨシタケシンスケ

1973年神奈川県生まれ。筑波大学大学院芸術研究科総合造形コース修了。2013年に初の絵本『りんごかも しれない』(ブロンズ新社)を出版。これまで『りんごかも しれない』『もうぬげない』(ブロンズ新社)『りゆうがあります』『なつみはなんにでもなれる』『おしっこちょっぴりもれたろう』(PHP研究所)『あつかったらぬげばいい』(白泉社)『あんなにあんなに』(ポプラ社)で7度にわたりMOE絵本屋さん大賞第1位に輝く。『りんごかも しれない』で第61回産経児童出版文化賞美術賞、『つまんないつまんない』(白泉社)の英語版『The Boring Book』で2019年ニューヨーク・タイムズ最優秀絵本賞受賞。

▼イベント情報

詳細は当館ウェブサイトにてお知らせします。

▼展覧会公式サイト

ヨシタケシンスケ展かもしれない

公式サイト<https://yoshitake-ten.exhibit.jp/>

▼チケット販売情報

日時指定券を販売いたします。事前購入にご協力ください。

詳細は下記 オンラインチケットサイトをご覧ください。

<https://e-tix.jp/setabun/>

ヨシタケシンスケ展かもしれない

2022年4月9日(土)～7月3日(日)
日時指定制

さんが考案した立体物などを展示し、作家の「頭のなか」をのぞいてみます。発想の豊かさに支えられたヨシタケさんの「かもしれない」展示空間を、ぜひご体感ください。

絵本作家としてのデビュー作『りんごかも しれない』(2013年)以降、子どもから大人まで大ブームを巻き起こしているヨシタケシンスケ。頭のなかに広がる果てし

ない妄想やアイデア、クスッと笑える人のクセやしぐさ、世界の真理をつくようなものの見方を細いペン先で描き続け、多くの人々をひきつけています。

ヨシタケさんは絵本を出版する以前から、イラストレーター、造形作家として活躍してきました。初の大規模個展となる本展では、作家の発想の源である小さなスケッチや絵本原画、本展のためにヨシタケ



「ヨシタケシンスケ展かもしれない」のイメージ ©Shinsuke Yoshitake



愛用の手帳(『あんなにあんなに』スケッチ)

撮影:野澤亘伸

- 未就学児はご予約の必要はありません。
- 当日券の販売予定枚数が終了している場合は、ご入場いただけません。
- お電話でのご予約は受け付けておりません。
- 週末・祝休日・会期末は混雑が予想されます。平日、会期前半のご来場をお勧めいたします。

主催＝公益財団法人せたがや文化財団
世田谷文学館、朝日新聞社、白泉社
協力＝アリス館、PHP研究所、ブロンズ新社、ポプラ社
後援＝世田谷区、世田谷区教育委員会
＊観覧料や開館時間等の施設ご利用情報は、12頁をご覧ください

企画展のご紹介

世田谷文学館開館25周年記念 セタブン大コレクション展

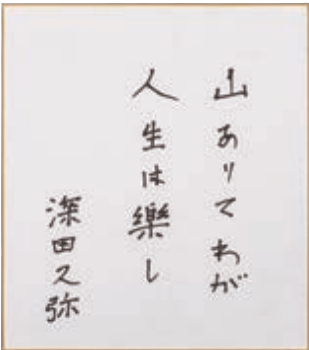
PART I「ふかくこの生を愛すべし」 2021年10月16日(土)～2022年3月31日(木)
PART II「山ありてわが人生は楽し」 2022年4月9日(土)～9月11日(日)

世田谷文学館は一昨年開館25周年を迎えました。この間収集した10万余点の資料の中から特色あるコレクションを「セタブン大コレクション」として2021年10月から「PART I ふかくこの生を愛すべし」「PART II 山ありてわが人生は楽し」の前後期に分け、一年がかりでご紹介していきます。文学史上貴重な創作資料から作家の日常使いの品まで、コレクションが持つひとつひとつの「モノ」語りをひもとき、私たちの人生の諸相を映し出す確かな記録としてお届けいたします。

深田久弥色紙

「山ありてわが人生は楽し」

深田久弥(1903～1971)は小説家・登山家。世田谷区松原に住み、登山家のパイブルとして知られる『日本百名山』を執筆した。生前「山のような人間にならねばならぬ、山のような文章が書けるようにならねばならぬ」と語っていたという。(4月9日から展示)



開館25周年記念

「世田谷文学館コレクション図鑑」

105点のコレクションをカラー図版でエピソードとともに紹介。《寄稿》紅野謙介、持田叙子、新保博久、樋口真嗣、《インタビュー》齋藤喜美子(北杜夫人) B5判・全192ページ ￥1,650円(税込) 世田谷文学館ミュージアムショップにて販売中。



セタブン大コレクション展

PART II「山ありてわが人生は楽し」

主な出品予定資料 ※会期中一部展示替えがございます。

- 芥川龍之介 齋藤茂吉あて書簡 1927年3月28日
- 村山槐多 《二少年図》(寄託)
- 林美美子 短冊「花のいのちはみじかくて苦しきことのみ多かりき」
- 小栗虫太郎 「黒死館殺人事件」原稿
- 松野一夫 「黒死館殺人事件」挿絵
- 横溝正史 「八つ墓村」原稿
- 江戸川乱歩 横溝正史あて書簡 1946年5月3日
- 黒澤 明 『七人の侍』登場人物スケッチ
- 成瀬巳喜男 『浮雲』撮影台本
- 遠藤周作 「アラベスケ」自筆ノート(学生時代の創作ノート)
- 石川 淳 「鷹」原稿
- 寺山修司 仁木悦子あて書簡 1958年2月22日
- 北 杜夫 「どくとるマンボウ航海記」原稿
- 佐藤愛子 「血脈」原稿
- 大藪春彦 「非情の掟」原稿

文学館が収集する資料は多岐にわたります。作家の自筆原稿や創作ノートや手紙、書画類から書籍や雑誌はもとより、と

きには1枚の写真や新聞切抜

あるいはお菓子の空き箱や石ころのようなものまで資料として集めることもあります。これらの「モノ」たちの背景には、彼らが創作に携わった日々の想いや、家族や友人たちとの関係、社会や時代とのかかわり、気分転換の方法、そして生老病死と、さまざまなエピソードや歴史が秘められています。

世田谷文学館は一昨年開館

森茉莉旧蔵・

犬のぬいぐるみ

森茉莉(1903～1987)が晩年可愛がっていたぬいぐるみ。葬儀の際、素材の性質上柩に入れられなかったが、弟の類が譲りうけ、もと鷗外の別荘のあった千葉県日在に建てた家で茉莉の写真とともに飾っていた。(9月11日まで展示)



柳生悦子『君も出世ができる』衣裳デザイン

和製ミュージカル映画の最高傑作とされる須川栄三監督

『君も出世ができる』(東宝 1964年)の衣裳デザイン。柳生

悦子(1929～2020)は映画衣裳デザイナーの草分けとして

活躍した。(4月9日から展示)

企画展

ヨシタケシンスケ展かもしれない
4月9日(土)～7月3日(日)

日時指定制 2階展示室

観覧料:
一般1,000円、
65歳以上・大学・高校生600円、
小・中学生300円

日時指定券: 詳細は下記「ヨシタケシンスケ展かもしれない」公式オンラインチケットサイトをご覧ください。
<https://e-tix.jp/setabun/>



展覧会メインビジュアル

シーズン展示

漫画家・山下和美展(仮)

7月30日(土)～9月4日(日)

入場無料 1階文学サロン

大学教授だった父親をモデルにした『天才柳沢教授の生活』や、令和3年度手塚治虫文化賞を受賞した『ランド』などで知られる区内在住の漫画家・山下和美。本展では世田谷を舞台にしたエッセイ漫画『数寄です!』と『世田谷イナ古い洋館の家主になる』も含めた直筆原稿と関連資料をご紹介します。



『ランド』講談社 2015年

Special Exhibitions

It might be Shinsuke Yoshitake's Exhibition
All visitors are required to pre-book timed tickets to visit this exhibition

<https://e-tix.jp/setabun/>

Exhibition period: Apr. 9 (Sat.) – July 3 (Sun.)

Admission fee: General 1,000 yen, Students (University, High School) / Seniors (Over 65) 600 yen, Students (Junior High, Elementary School) 300 yen

Kazumi Yamashita Exhibition

Exhibition period: July 30 (Sat.) – Sept. 4 (Sun.)

Admission free

ご来館にあたってのお願い

当館では新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、換気を含めて衛生管理を徹底させ、会場運営を行います。お客さまにおかれましては、次のことへのご協力をお願いいたします。

- 感染症対策のため、混雑時は入場を制限させていただきます。
- 37.5℃以上の発熱のある方は入館をお断りします(入館時に検温させていただきます)。
- 館内ではマスクを着用ください。
- 咳、咽頭痛等、風邪のような症状がある方はご来館をお控えください。
- クロークサービスはございません。大きなお荷物のご入館はお控えください(ベビーカー置き場はあり)。
- 駐車場は利用台数が限られます。公共交通機関のご利用をお願いします。
- その他、注意事項の追加・更新がございますのでご来館前に必ず文学館HPをご確認ください。

利用案内

開館時間: 10時～18時(展覧会入場は17時30分まで)

休館日: 毎週月曜日(月曜が祝日の場合は開館し翌日休館)

割引料金: 企画展・コレクション展ともに団体(20名以上)は2割引

※団体利用は事前にお問合せください。

※障害者手帳をお持ちの方は一般料金の半額。

※コレクション展のみ世田谷区内在住、在校の小・中学生は土曜、日曜、祝・休日及び夏休み期間は無料。

交通案内: 京王線「芦花公園」駅南口より徒歩5分

小田急線「千歳船橋」駅より京王バス(千歳烏山駅行)

「芦花恒春園」下車徒歩5分

※駐車場は利用台数が限られます。公共交通機関をご利用ください



コレクション展

世田谷文学館開館25周年記念

セタブン
大コレクション展
PART II

「山ありて
わが人生は楽し」

4月9日(土)～
9月11日(日)

観覧料:
一般200円、
高校・大学生150円、
65歳以上・小・中学生
100円



同時開催 ムットーニのからくり劇場

Permanent Collection

Setagaya Literary Museum 25th Anniversary -
Setagaya Literary Collection Exhibition PART II
Simultaneously held: Muttoni's Puppet Theater

Exhibition period: Apr. 9 (Sat.) – Sept. 11 (Sun.)

Admission fee: General 200 yen, Students (University, High School) / Seniors (Over 65) 150 yen, Students (Junior High, Elementary School) 100 yen

*Elementary and junior high school students, who studies or resides in Setagaya city, are admitted free on weekends, national holidays, and during the summer holidays.

Safety Precautions when Visiting the Museum

In operating the museum, we take every precaution to maintain hygiene, including ventilation, in order to prevent the spread of Covid-19 infections. We ask visitors for their cooperation in the following.

- As a measure to prevent infections, we limit admission during busy times.
- We refuse admission to those with a fever of 37.5℃ or higher. (Temperatures are measured when entering.)
- Please wear a mask while in the museum.
- We ask that you refrain from visiting if you have a cough, sore throat or other cold-like symptoms.
- We do not provide checkroom services. Please refrain from bringing large luggage when visiting. (A baby carriage storage area is available.)
- Parking space is limited. Please use public transportation.
- Other additions and updates will be made to these precautions, so please be sure to check the museum homepage before visiting.

Visitor Information

Opening Hours: 10:00 am to 6:00 pm (last admission 5:30 pm)

Closures: Every Monday (Closed Tuesday when a national holiday falls on Monday)

Group Discount: Groups of 20+ visitors will receive a 20% discount on admission fee both collection and special exhibitions.

Disability certificate holders will be admitted at 50% the general rate
Access: 5-minute walk from Roka-koen Station's South Exit (Keio Line)
5-minute walk from Roka Koshun-en Park (take Keio Bus from Chitose-Funabashi Station [Odakyu Line] towards Chitose-Karasuyama Station [Keio Line])

*The number of parking spots available for use is limited. Please use public transportation.